

絶滅の危機にある大型類人猿に関する要望書

大型類人猿は、私たち人類に最も近い親類です。アフリカにはチンパンジー、ピグミーチンパンジー（ボノボ）、ゴリラの 3 種が住み、アジアにはボルネオとスマトラにオランウータンが住んでいます。大型類人猿は主として森林地帯に住み、食べ物はおもに甘味の強い大型の果実です。彼らは多くの種子を嚙まずに果肉とともに呑みこみます。そのうえ、完熟した、つまり種子がよく成長した果実を選んで食べますので、排泄すると種子は発芽します。大型類人猿は長距離を移動しますので、種子は遠くまで、またさまざまなタイプの植生に運ばれます。このことはその植物の分布を広げるだけでなく、人類によって破壊された植生に新たな森林の種子を播くことにもなります。つまり、森林再生の立て役者としてきわめて重要な役割を果たしているのです。

チンパンジーは、病気になると特定の植物の苦い髄を食べることがあります。化学分析の結果、低濃度で最近などを殺す能力をもつ成分を含むことがわかりました。チンパンジーは薬も使うのです。将来、こういった成分の中から人類の薬品として開発されるものも出てくるでしょう。

大型類人猿と人類は、ひじょうに多くの特徴を共有しています。現代生物学では、かれらはヒト科に分類されています。怒り、恐れなどの原始的な感情だけでなく、悲しみ、喜び、絶望、嫉妬、同情など、人間的と呼ばれる感情ももっているのです。鏡を見て自己だとわかるのも大型類人猿だけです。つまり、自己認知ができるのです。チンパンジーの道具の使用や製作の能力はよく知られています。アフリカ各地での研究によって、各地域特有の行動がたくさん見つかっています。チンパンジーには文化もあるのです。たとえば、同じタンガニイカ湖畔にあり、同じような昆虫相をもっているのに、ゴンベ国立公園ではサスライアリの行列に 80 センチほどの棒を浸して釣り上げ、マハレ山塊国立公園では樹上性のオオアリを 30 センチほどの細い樹皮で釣り上げます。また、西アフリカのチンパンジーは硬い木の実を石で叩いて割り、中身を取り出して食べることも知られています。

お返しや協力の能力をもつことも、実験や野外で示されてきました。チンパンジーでは、集団間で戦争さえすることが知られています。英語の文章を聞いて理解するピグミーチンパンジーがいます。この個体は赤ん坊のとき英語を聞いて育ち、1000 の単語を覚え、文法も理解するようになったのです。

さて、このように人類の仲間としか考えられない大型類人猿に絶滅の危機が迫っています。大型類人猿の減少は、かれらの生息地が農耕地に変えられることが最大の原因だと考えられてきましたが、最近、必ずしもそうではないことがわかりました。とくに類人猿が複数種住み生息密度も高い、中央アフリカのコンゴ共和国、コンゴ民主共和国、ガボンの 3 国が悲惨な事態にあります。これらの 3 国に、アフリカの大型類人猿の 60%以上が住んでいます。この大型類人猿の最後の砦が危ないのです。木材業者が奥地に入り、有用財を採伐しています。この活動自体も、類人猿の生活に悪い影響を与えています。しかし、現在もっと大きな問題になっているのは、この活動から派生しているもう一つの人間活動です。奥地であるため、伐採に従事する労働者の食料を入手するのがむずかしいという問題があります。そこで、伐採業者はハンターを招き、動物を殺させて労働者に供給するのです。殺される動物は、大型のものはバッファロー、ボンゴなどのウシ科の有蹄類やゾウです。しかし、よく殺されるのは数の多いサル類とダイカーです。

問題は、こうして林業従事者用に狩りをしてきたハンターが、木林搬出用に切り開かれた道路を利用して「ブッシュミート（野生動物の肉）」を数 100 キロ以上も離れた都市や、さらには国外に輸出し、金儲けを始めたことです。人口の少ないアフリカの奥地でその土地の住民が野生動物を狩るのはやむをえないですし、それは野生動物の人口に大きな影響を与えるものではありません。それゆえ、今まで絶

滅せずに動物が生き残ってきたのです。それは「サブシステム・ハンティング」だと言うことができるでしょう。

しかし、奥地と都市が道路で結ばれ、都市住民が消費者となった今、「コマーシャル・ハンティング」に姿を変えました。これは、決して持続的な生計活動ではありません。象牙海岸の首都アビジャンは100万人の人口を抱える大都市です。そこのレストランでは、ブッシュミートの料理が人気を呼んでいます。

レストランに出てくる肉の多くは、畑の近くの二次林や藪で捕られるヤマアラシ、オニネズミ、ケインラットなどの齧歯類の仲間です。これらは繁殖力が高く、持続的に間引きするのは可能でしょう。大型類人猿は、市場で販売されるブッシュミートのうち1%にも満たず、重要ではありません。しかし、大型類人猿は繁殖率が非常に低いため、狩猟によって最大の被害を受けるのです。大型類人猿は繁殖率がひじょうに低いため、狩猟によって最大の被害を受けるのです。大型類人猿は5~6年に1度、1頭だけの子どもを産み、しかも幼児死亡率は高いのです。

すでにアフリカ中央部の多くの地方で、森は残っているが動物はいないところが増えていています。そしてまっさきに消えるのは大型類人猿なのです。アフリカの諸政府が人口抑制策を採り、森林を農耕地へ転換するペースをゆるめるようになるずっと前に、大型類人猿が絶滅する危険性が增大しています。

大型類人猿はヒトと他の動物の連続性を確認させるかけがえのない存在です。人間中心主義の思想が、人間だけが地球資源を独占し、動植物を根絶やしにするのを許してきました。大型類人猿こそ、人間のユニークさに反旗を翻し、反省を迫る存在です。彼らがいなくなれば、人間と他の動物の断絶は限りなく広がるでしょう。人間のエゴイズムは、留まるところを知らず、それは人類の根絶を招くことでしょう。

以上から、大型類人猿を、特別に保全の対象にすべきだと私たちは主張いたします。大型類人猿が生存するには広い行動域が必要であり、かれらが生存できる保護区がたくさんできれば、ほかの多数の動植物も生き残れるのです。つまり、「フラッグシップ・スピーシーズ」としても重要です。大型類人猿の研究者は、大型類人猿に特別のステータスを与えるようユネスコに誓願しつつあります。本年5月にシカゴで開かれた類人猿保護の国際会議「類人猿・21世紀への挑戦」では、400人の参加者全体がこの誓願を支持しました。

国際霊長類学会と日本霊長類学会は今、ユネスコに新たな提案を準備しています。それはユネスコに「世界遺産種」という新たなカテゴリーを設けてほしいという誓願です。大型類人猿に特別の保全の地位を与えてもらい、絶滅から守ろうという趣旨です。

先進国政府は、ODAを開発途上国に供与するさい、当該の開発途上国が具体的で有効な大型類人猿の保全策を実施することを条件にしてもらいたい、と私たちは考えています。ブッシュミート経済から大型類人猿やゾウなどの絶滅危惧種を除外するよう途上国政府が措置を取ることは可能です。たとえば、大型類人猿の住む国立公園などの保護区のパトロールの強化、市場における類人猿の肉の販売禁止と違反者への厳罰、類人猿保全を伐採会社へのコンセッション供与の条件とすること、伐採業者への作業監視態勢の強化、ブッシュミート販売に替わる新しい産業・雇用の創出などが考えられます。

国際霊長類学会と日本霊長類学会はこの政策の実施にあたって、日本政府がイニシアティブを採ってくださるよう要望いたします。日本は、動物の保護には熱心でないという国際的な批判を受けています。その名誉挽回のためにも、ODAと大型類人猿保全策をスワップするという政策をどこの国より早く採っていただきたいのです。日本がリーダーシップを採ることが期待される理由は他にもたくさんあります。

第一に、日本が米国とならんでアフリカ大型類人猿研究に最も熱心な国だからです。第二に、ユネスコに最大の寄金をしているのは日本です。第三に、日本はアフリカの類人猿生息国に最大の ODA を供給している国の一つだからです。

ユネスコの現事務局長は松浦耕一郎氏であり、ますます日本が文化方面に世界のイニシアティブを採るチャンスだと考えます。

大型類人猿が 21 世紀に絶滅せず、子孫がこの青い惑星を人類のユニークな親類たちと共有できるよう、ぜひとも日本政府がイニシアティブを採っていただくよう切望いたします。

2000 年 12 月 20 日

国際霊長類学会会長 西田利貞（署名）

日本霊長類学会会長 杉山幸丸（署名捺印）

日本国内閣総理大臣 森善朗殿

外務大臣 河野洋平殿

文部大臣 町村信孝殿

環境庁長官 川口順子殿

付：国際会議「類人猿・21 世紀への挑戦」

（2000 年 5 月 13 日、シカゴ）で採択された決議

類人猿は人類と最も近縁なリビング・リンクであり、われわれとよく似た感情や行動や知性をもつ。彼らは自然の驚異の一つである。そのうえ、彼らは熱帯森林生態系の維持と更新にかけがえのない役割を果たす。しかし、かれらの数は人間の活動のために驚くべき勢いで減りつつある。強力で効果のある保全の努力がなければ、彼らはまもなく永久に消え去るだろう。それゆえ、類人猿が絶滅から免れるためにあらゆる可能な手段を採ることができるように、ユネスコが類人猿に特別のステータスを与えるよう要望する。われわれの子孫がこれらのユニークな人間の親類とこの惑星に同居し続けることができるように。